

俳諧

植

继

集

巻





和号の巻末に
ありし能く其
所をたしむる
と云ふは、
書に老人
白くして
相伝ふは

つ葉乃孫ふ何とぬ終はげし
風流の味家あは長舌とこそ
新公を筆集とせし二年に考國の
主人を鮎乃小菊のたたるたを
松島結林ふ拜志とより終
阿まし又也城野のま子の
花小回紙たあこそしり末の松山の
露も母をたを觀すかえち事た

まら終すまし何と進はま
かよあつ免これふ諸好生乃花
即葉乃その葉紙合を桜末よあ
せし子紙家を捨て予ふむられ
此乃園位ひ一日の波草家終まを
志とくし心とくありらし
まははこよは由志由とこよとゆま
昔も故波乃流終末の園あ有る

ありと自由にして、動形虎の意下
少老首領と云ふ事、其の事、其の事
之を、其の事、其の事、其の事
と如く、其の事、其の事、其の事

一止



松島

松島やまの六かきくくゆふ路 故人 暁 臺

松島の産り光陰を経る

海とのみ海ありてせし海の春 丈芝坊

志しき海に浪を起し秋の香 雄 湖

松島や一表

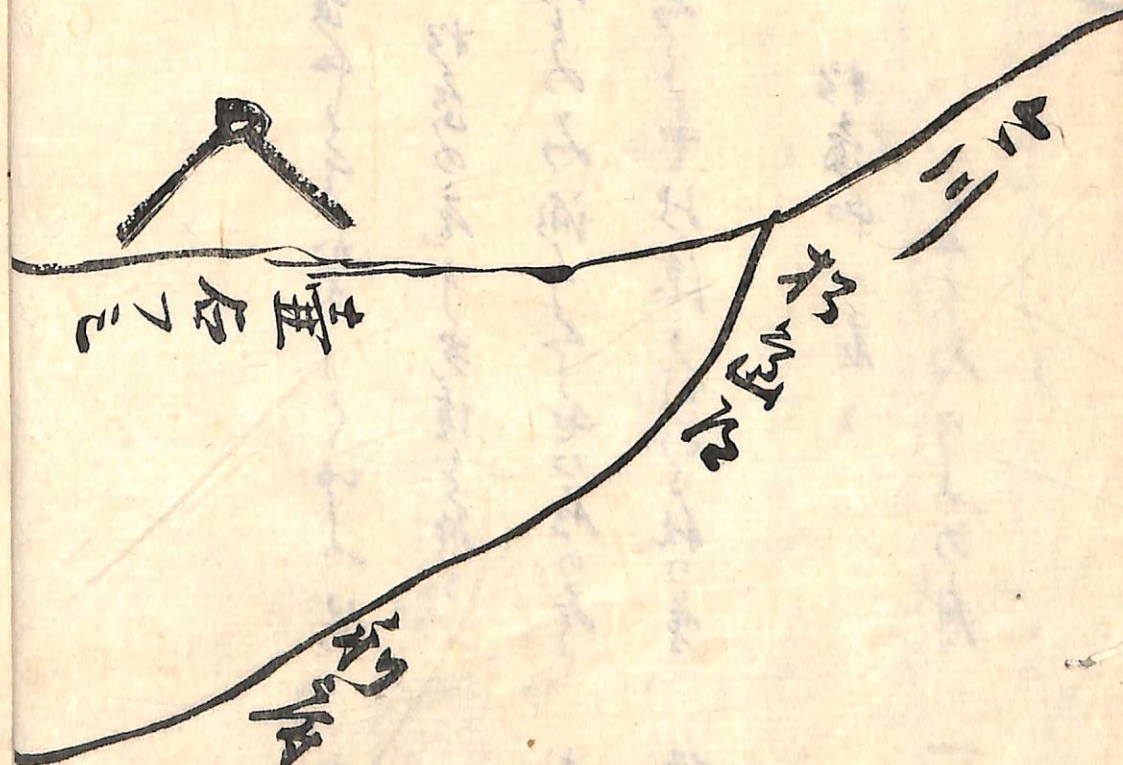
海ありての月 一止

ありと自由にして、
少老、筆、紙と、
意、を、手、に、
と、如、く、
と、如、く、

一止



二物 洗后末也



三物 洗后末也

洗后末也

洗后末也

此画固为私形尾乃先至史定坊
白居皮能事行也

影足之今之空一子親

鼎池

松島より旅立流芝の對し、思ひ出せる事
 あらふ為に辨めと記し、仙臺の素若妻のとりよ
 老の趣き思ふまゝあつくと細き日記に
 見ゆべきは江國門はちあつたは程え
 史其地を辨め是又一ひらのあつたは程え
 人のあつたは程え
 傳は様を辨め、松島中をりつとねをひきまゝ

壺の研ぎききまは松島聖田にまじりて
 人のあつたは程え

別 遊ふとよれたあつたは程えの辨 卓池
 多 ちまうら 晴とまの船 福 流 芝
 常 みる 傷、うら 木の芽つけこんて 橋 居
 急 り 出さまぬ 札、うら 新 朱 芳
 あ の 月 澄 市 風 の ち り 下 ち 田 風
 猿 の 歩 来 ぬ 速 し 新 朱 六 蟬

松島より旅立深草より對し、思ひ出せる事

あまの箱の御のとら仙臺の赤岩裏のとり

若き頃の趣を画ふまゝおぼしむと細き紙記の

具ゆき多量に同門にみちあひあはれえ

又草場を語る是又一ひらのあはれに

尺をさしあはれを志すまじきまじきあはれ

係り探せし出づ松島中をりつゝおぼしき

空	葦	を	と	め	き	を	也	所	より	々
袴	美	を	り	揃	へ	祝	ひ	日		
あ	ま	り	く	吾	を	体	よ	く	窮	ら
川	の	細	涼	は	早	を	け	る	序	
寐	を	き	ぬ	と	風	物	の	加	減	の
心	ら	あ	ま	り	々	答	を	顔	色	
澤	山	と	魚	谷	の	を	け	る	船	は
別	々	角	力	の	風	呂	立	顔	あり	
										東
										石
										洗
										竹
										仙
										菜
										携
										丘
										青
										菱
										石
										来
										恒
										衣
										波
										文

た	ら	り	引	て	見	た	る	鳴	子	純
り	ち	ま	坂	を	流	く	ま	の	木	
茶	山	ら	の	鼻	を	ま	り	の	催	ひ
隣	の	玉	花	一	雛	顔	々			
										五
										葉

右一順下畧

目さねうゝ二ッ立たり揚雪崖

仙車 三六

人の住家もた見えは遠きうゝ

藤雪

りけうもたら何うもみははむの宿

持立

根うらりや苔の中よりふきは苔

朱芳

雪やちりうゝ暮るりか二やと詠

一庭

冬も彩やまけい一軒もそれの暮

波文

葉もつゝぬ海苔の暮もやむの雲

翠錦

音もくくも木は芽も餘る常小

稻居

梅も香も楫のとりもきおる舟

茶園

元りやとり一替もくも祠の灯

五菴

明もより暮もくもや魚も店

六解

垣内も多もくもおるもひまうり

怪一

と見えもくもそのあつもき折れ

書可

留雪もらんて一戻もくも海もまの月

東石

向い温家よと度まきあふる親 藤重
 健し子々そとらなり梅の節 碓月
 遠く甲へ出て插そあるまなむ 市井
 常やあふのぬえうら若く一暮る 桐古
 月さすそ水節見ゆる新樹は 汝堂
 葦原のまき落つるぬ火節は 如昇
 皆志川と顔斗ふりそと一そめ 寒馬
 穉の葉と中流にけし難きなり 里致

降とみよ自在もひをき 楓 秋橋
 山吹も少しつあり篠の中 流竹
 吹多きそ水の志よりや冬の月 唐雨
 朝風と虹見そあけ至山の妻 枝雲
 月影下と川節もたらそまは月 二青
 穀一重おと水田やまは月 石采
 今控と安物の傷やまらそは 梅史
 鶴取や市日斗能人通り 左蒼

雪のそよやまをたまたまある舟俤 視外
 新橋の田を流しや春の雨 飯丈
 月をさしや石切おとや冬は月 几蘇
 田の中を新木とまきや年の暮 完伍
 多けいと一愛より一女郎む 水竹
 木かきやまをなまきぬ西明 鶴所
 松林の見よる程や春の園 蓮亭
 仕過るまを急ぐやうや二日後 雪斗

ちり推るまを掃るせぬ落葉は 苔坪
 加ふくと白くはるのまや雪の上 三岳
 人寄新上は降あり年終雪 吉江 貞山
 向連志しや羊よけの燕は 双竹
 雪のそよやまをたまたま 猪水
 奥山やくら焼くは 為中
 芳草は茂り雪は 氷青
 葉葉や落しは通りを 清舉

始書此畫くく見之る雨之し 年々
五月也や皆天く通ふ水く
あまき水鶴峰より池の雨 其葉
山吹や皆もさうぬらしたま枝 杜水
飛こんで顔斗り生れ蛙う乳 梧宮
枚重木より葉の音は 峯嶺
下流をく舟く上るやまき小 東平
舞やまあふ年より顔け白い 青菱

古くより書きたるやまき秋 且松
雪く水くくを形明り 嵐牛
二日くをわつるあまき年より水 後河 晁
居風名く入るよまきぬ花く水 其葉
水く顔くをさくくのいへる百舌の舌 蟻江
綿壳をいけを畫するふるふ 碧山
雪や雨より十分ぬらき 桑雨
八朔やまきを流けぬ葉一抱 仙臺

苗はあゝ意と見えず猫の音 南 辨
 春の川や氷かき去く水はあゝ 高 峯
 麦秋やまゝ志と見えし照り 伯 耳
 体と見えし降や桑山の初晴白 春 莊
 梅はまゝ出ぬし早もりのや新雪愛 如 梳
 町裏の足と見えし遠き松野 抱 布
 踏次口の萩と見えし春 菟 威 充
 うらとけし連斗ありむきり 山 青

足袋脱てみてもつ見えし初梅 春 菟
 い川と見えし自見と見えし梅の志 伯 玉
 町並をぬけし家あり大柳 守 層
 牛をわたり桑の中のたまり水 春 莊
 白むと見えし菜や松あり下 宿 庄 布
 山をわたり不別と見えし花の志 高 峯 直 長

若野の柳

そなた達の柳を今も田の時よあり文明
の頃越り十九世の工人は柳の精を満ちあ
るる若野代の工人さきなり興をよめ歌
を柳に結縁は結ぶさうそ越りの柳を
中へさる又彼清くもかきくよさのまへ
さうふむりのかさをすす

笠をりて見よ世をちかやまに 流 笠
田はな 幾年 思ふをいふ言 楓 関
生壁はうらうら月ありらむと 貞 士
年、うけのまじ仕出し物 芝
風平なるを春春と雪もよむ 関
指費出年一玄刻の鐘つゝ 士

白川の古関

幕はくまをえけ印のむと古人冠を二甲

衣装をあらたけしとくすよとて一巻を

皆履む杖を杖らちのうへにそまは

多しはききんしと剃刀はもろよ

白剃は自由を借すつらうとたし

袖をききんしは新しあつたあし

剃多しはむや流く溪のまみり流 流 芝

古ききしはあはと新自 佛 孫

生活は掃を掃くおくらせと 清 素

炭はききしはけのききたふき 對 自

油はくす尻は柔の滑うと 風 毛

新しき土は光新雪 母 扇 貞 士

軒新粟

昔の粟の枝もも枝も用ひ給ひしより

此粟新粟の本も世の人此見し子ぬ花の

年々も増増しゆく伸切らゆくは法

たはぬはた老くま枯もあまの秋もあまの

月も本切らゆくも世の世の世の世の世の

十田忌の追福をいふみ一人はあがりとも又そを

生たらぬもくさくさの世もあまの世もあまの

秋の枝も枝もありぬ軒の粟 流 芝

東の枝も枝もあがりぬ水かけ 多 ぶらぬ

晨明も布つて白をまもるらん 清 民

常新もくさくさの枝もあまの 春 高

あまの枝もくさくさの枝もあまの 静 夫

年終りもくさくさの枝もあまの 一 仙

浅香の沼

沼をあきくくう流るるまきく美

ちのやまよあき乱は末枯いそくは

満より君る花よりつるかふ実味

あまふんあきくくくく

水雲やきふ何をりあつえき 流 芝

小峯ちくく流く沼の夕月一 蓑

離離流れきくをあき湯より 米 月

汲くまた茶のゆりあきくあき 石

茶椀あききくの白いのあきく 豊 水

足てみるうらうら山を 降 歩 方 儀

浅香の沼

黒塚

二本松林遠く東門より一岩屋と一丸
すみやかなるや一石を敷む雷鳴
しほしき結ぶやまゝ寺と入
しをきこいそよそく懸ひし雨は
まのつちを待

昔より飛雨をさする岩屋は流芝
夢後をゆく麻をこる秋に東里
出代も啼るは音よふむゆて鼎池
ぬくこを籠れ目こくち敷く一旦
桑破りけりぬ料の月車さし夷菊
猫より追きし嵐志川まる葉地

信夫山

思ひはゆふの夜に
いづれかあり下は
あまのついでに
人の心は
あまのついでに

宵より月也志し
石のおとけ強
鳴のち
舟上
あちこち
そを横

流

大

三

桂

素

喜

信支をちまひ

中ふ遠き石の守ち土中の埋め

山隈ふあり田圃の喜字をありしよ

了里人のいりしちまひを得さる

実あり時の真ふありて五穀をうとく

あつる路をいれまひやま

とらまひや解愛を捨る石の露 流 芝

等年物とまひ路 野の麓 守 三

おれに路をりあり月の晨の夕 素 湖

著あらしふりし路ふは井戸 直 橋

いさかき蚕のうらを際のおれ 草 居

おまむのありおひし青麦 一 美

當紅松原

浮世を為の松とて人前名利を捨て

塵埃のちるふ年を期と志たふ心

覺英信都の心言れをいりて志すの端

思ひて昔のころの物をいりてふ心すの

新西工人の涙をいり松を遊まはるあり松

いそいだたむしうとてふ心すのころの

名松をいりて松の感つては

雲ささく秋の庭葉や松原寺 流芝

通ふ兔耳あきり 夏 細 音 阿

更く知る月を飛指の苗あり 四 教

眼鏡のまや紅懐 千 鳴 柳 枝

庭まきも鶴もまつをハ度くあり 澤 水

わらひ人紅つくちと折紅梅 松 翠

道祖神

重陽の日神前より長く暮角史の日は

神よりきたる日ささくわらふ秋を

くま合をうませたるまけけけけ

女心はるは縁みをもあはれおる

あつとそ般風よりをわゆる斗殺は

漂泊狂児をあらたにをたゆる想むのま

せんとあふ枝ちのうらさき

清くくさく志のま多難や菊の露 流 芝

清くはは露の跡も新葉 江 三

玉杯の如くあふ香を月晴て 栞 皮

備後まのひの表切り出せ 三 船

整利くは志くくあく挿ちりし 一 由

直く木は葉のあまきれはけ 詠 柳

雲城燈

此中不...

...

...

家之欲... 亦... 亦... 亦... 亦... 亦... 亦...
亦... 亦... 亦... 亦... 亦... 亦...
亦... 亦... 亦... 亦... 亦... 亦...
亦... 亦... 亦... 亦... 亦... 亦...
亦... 亦... 亦... 亦... 亦... 亦...
亦... 亦... 亦... 亦... 亦... 亦...

燕澤の碑

碑面圓相の内、梵梵の雁字城類、千年文廿二宮
 四界一行七字をあらわす一界、千紀依名を尋ねば
 幸に秋去海を渡せし異賊のむかひにありける
 獲念園覺寺に再出佛之符法を以て宝國慶元願
 人々祖元より國破る事未だなく鐘念といふ古
 北條氏のまゝふりてり夢中は頌に海虜の潮浪を
 巾より捲く一と連るるまゝお前、時世の有縁
 よるるも、然れども、思ふも、世と世の縁をえり
 悔りも、思ふ文の離合と、語をも、亡魂を、
 文意を、つと人々、の、は、愛、い、い、か、
 死、し、と、か、く、な、れ、や、は、く、と、り、
 滿苑善梵の、あ、れ、碑、文、より、其、神、風、の、奇、瑞、
 あ、ら、ま、く、は、是、を、宝、國、の、志、と、い、ふ、人

秋月や眼より見つて秋の香
 流 芝

風をさらけりや
 燕 山

木をさるるに袖を垣まゝ唐を引て
 通 山

机の下に暮るる
 総 宜

皺をみれば、惟る志あり
 松 眠

人目の影乃、常とせり
 知 休

未だ松山

暮らしては松風よりしらぬのせうハ幡の里
よつては沖舟石を尋るゝ農家のあはれもふ
あつ國のかゝりのあはれもふ石をちりもふ
あつ林者よりつのはをめぐらふたふもつら
まはまは松山より松のひらくは墓原より
古たはゆしきよたらまの守の軒はま
程あはれもつらも是さうつらつら四節とま
まはまは松山海の傍をふたは松山かゝつら
くはまは又美津よりつらもつらもつら

置のものを霧も消るやまはけ 流 芝

もたふ松 松より松足らぬ月 永 月

燃 志さる世兼火より夏の者矣え 白 水

追ふもつら 梅を 折り ぬ 松 折 人

雪 初る木 履く物も 哀 通り 梅 露

白く 花よりけり 露の 墓より 子 夜

松屋

此處の風景もとい洞窟西遊を証す
と後河の祖神なるを聞かむ
そ哉今もいふ何さういふ人きせし
志を起し杖を出しとてうり回せの
年月を物くかき思ひ出ふ持素者
好風を志すい遊化の天工をいふ

松屋の風景もとい洞窟西遊を証す

松屋や古き言葉を眼のあがり 流
うはらうらうらうら 雨の夕景 心
月影出るといふ持素者 峯
撰りたりをいふと 鬼灯 化
籠るまのいふ急の勢のきり 素
速きより 万ふ 良 室う 東
東 露

軒端の梅

紅蓮尾とてしる羽少家流の春を考る人

おまじまはは松島より老いぬ夜終るをこと

まのまはふたりを求めらるる阿しを採

のいろふおまじまは思ひて記念の梅の傍

志すのいふまを物して其のいそめらけ

せし程々る松形流の主人とて芳志せり

徳まつあまの流の歌うは別徳のいそまみん

志すまはし 記念の梅をみちし 流 芝

いく秋より 軒の露を 一 止

地子をもつ 遠ま月の片をうて 如 風

水波おとちりてせまき 羽 人

物まはるの枯多れ年の暮 二 丘

煤をたふす雪のちりて 三 芝

途絶の橋

岩切村を冠川にそよむ岩壁を
たぐりゆく細き川に十府の池に
遠くはるかに丸木橋をたぐり
かきりきり川乃流水を岸をあらう
土崩れて世来自由ありて

水あはれ橋をたぐり秋の風流
空しくをりて空をぬ月雨
多岐おはれ世より徳のまをたぐり
片の橋おはれせしむはく文居
何とたぐり山よりおこり村の時
日は短くともぬ麦荷茶荷

黒羽の笠松

黒羽の徳代澤法吉氏の松舎亭馳名千八百
廿詠めある好景あり程宿をくめまわつて
そを歌と句を乞ひ濟く歌面を志す一車屋の
料をけらきつるにうて暴風甚る松あり
破換せしう其次四句のて存せし年々

笠松や松竹多しは遊ま

松を笠うまうて句を志すはく大年の國恩を忘
れしうまうてうては法吉は松ありと其松の
かまを文書と程うを表し其吟きものうて
松の文書と考らうてうては風流とあるは松人
の物好ありけり

月雪より雪あり松は下り流

舞よりいり川庭乃冬枯如

智梁の世も具と出つけ大

そりしうもよひ様のみあひ丁

出う雪は松たもあぬ海と臺其

雪をまききりて雪ちのよれ

松竹多しは遊ま

宇都宮神社

豊城大彦命東國を治めたりと記大和の國大
 三輪の神を二荒山の白根山降まつ一紀也
 降よあまのここのそ一宮うつ白峰に遷せありけるハ
 別今社地より旧地の山名をよつ神号とい
 二荒山再基のといれり是と仰りたりしをよつ
 とのふり荒山古の神と崇めなるとも又云唐
 二年の年將門滅亡すはは神の加護ありとて
 正一位勲一等と極位の神階はあり降よ白峰
 の神社を遷りけるの言とよ申されたりとて
 き教ありは宇都宮の言と辨りたり也移と移け
 世と思ふを世ハ思ふを世と云ふはたすしとて
 今又之を移ふとて再建ありとの言ありとて
 宇都宮神社を仰きなりとて

別より日の輝や春木立 流芝
 志川や経風よ霜々よる庭 其葉
 先觸と一志よる物たるんて 梨長
 もつとらひのたのぬ雪洞 塵外
 是をふたせしむるも志よる月の暈 梅二
 志路留世と春とや新桐 蘿心

巴波川

朽木此驛の西を流きてまた粟橋を
 ぬり利根川とて大江入りのさき也流石夜
 船の自由を濟し高麗の舟利對内をくわん水
 源をかき山より流きてさきへく田圃よか
 て旱魃の愁ひなく洪水の難もさきよとそ
 地の繁榮豊饒と今くは河伯の真如ありん

水をり枯月も見えさうつま川 流 芝
 日いあささかき冬に茅柳 雲 岳
 深物を虎落竹ありさうなたて 道 雄
 ちうりんとあせり椽の存あり 竹 雨
 あり合は茶飯もさき月の前 加 法
 おく色先立しはさうく 葎 湖

天嶽寺佛名會

凡夫罪障垢穢の身を百千劫を経て清く
も清めたり唯禮懺清淨の水は清
く空生罪業の垢を洗ふべしとあり
是よりんや無教信切生死の死を消
滅せんたれと法仏の正名を異口同音
唱へ敬礼する老若の考と殊極よ美えり

天嶽寺佛名會

おく衆より後きみより仏名を
檀木つづのいよ清く証は言
人も志すねとしく枝たす
おれ志ありよも殿あり多た
古酒よりも新酒のこもる月
風呂は火を消す所よあり
流 芝
里 雪
桂 葉
梅 山
春 彦
交 輝

天嶽寺佛名會

越ヶ谷の桃畑

砂地多しと他物に實けり甲斐なし
とて畑に棗を植て実をまきとりの
貴物とせり花の次を種家諸人乃
心を勤ふ竹角ふく魚の枝をいつて
此第に村里へ植是しと累年お祭
後たのしみあふぬ

豊年結ぶしや雪お棗畑 流芝
旭志川、うや厚鴨の春 志一
猿味増像仕也、挿習て 春鳥
春ふらふと多き他のおんをん 呉木
ゆめお空清きよ月の影赤く 貴友
そよ〜 風のそよ〜と種芒 木子

笑う松原より物屋の道程を結ぶ人

峰をまねて影のほろり里の遠くをたづねて

春を鳥光おとせよかとうつらな物状を

新らねし思ひのきりきりあつた

まじりあつたあまのこゝろのそら

春を鳥光おとせよかとうつらな物状を

鳥池

鳥光

2

